

唐塗の呼称ならびに史的变化に ついての考察

——久保博氏の大和塗工程も含めて——

佐 藤 武 司*

緒 言

今日、青森県の弘前市^{ひろさき}とその周辺で生産され、「津軽塗」と呼ばれている漆器類がある。この津軽塗の中に、多孔状の仕掛けべら（写真1）によって、絞漆が凸模様^{しぼうるし}に付けられ、研磨されて仕上げられる塗技法がある。

この技法を「唐塗技法」といい、仕掛けべらによる絞漆の凸模様を基本として塗膜面に現われる模様を「唐模様」といい、唐模様を主体にして仕上げられた漆器類を「唐塗の塗物」とか、単に「唐塗」と呼んでいる。

弘前市において唐塗という呼称の歴史は古く、古文書（御国日記）の正徳五乙未年（1715年）正月十七甲寅日に、「唐塗之御文箱……」と書かれ、この頃からのものである。

唐塗模様に塗られた漆器類を「津軽塗」という人が多く、また唐塗模様による器物の生産が多いので、今日では唐塗を「津軽塗」と呼んでいる程である。

絞漆による唐模様を基本にして塗られた漆器の塗模様の種類は多く、その漆器の呼び名の大部分は、唐塗の上塗の色彩による場合が多い。

しかし、これら上塗の色彩などに基づいた呼称の中であって、上塗の色彩などに関連をもたない呼称の唐塗技法・「大和塗^{やまと}」がある。

大和塗は、大正元年（1912年）から昭和20年（1945年）頃まで、弘前市の久保證氏などに依って塗られ、久保博氏に受け継がれた技法である。

著者は、唐塗に関して、その呼称、技法の史的变化に考察を加わえるなかで、この大和塗工程とこれに使われる彩漆の粘度にも触れてみた。

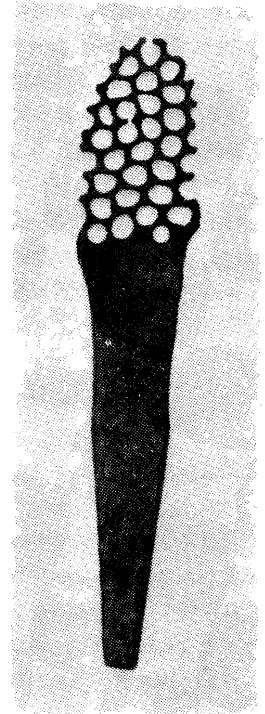


写真1 仕掛けべら、
長さ28cm
久保證氏使用

呼称についての考察

1 呼称の意味

「唐塗」という語には、「技法」「模様」「青森県の弘前市で塗られた津軽塗漆器^{ねりもの}」という意味がある。

今日の唐塗技法とは、素黒目漆（透漆^{すくめうるし}）と卵白を混合してつくった絞漆^{しぼうるし}を、多孔状の仕掛けべらという特殊な形のへらで、器物へ凸状に転写し、その上に無油の彩漆や透漆^{いろうるし}を塗り重ね、また粉類を蒔いたりして凹凸状になった塗膜を、砥石や研磨紙で研いで平滑にする「塗技法の一技法」をいい、この技法の中で、仕掛けべらに依って付けられた凸状の絞漆の模様を「仕掛^{しかけ}」と呼び、この模様を基本にして塗られた「漆器類」を

* 弘前大学教育学部技術科教室

「唐塗の塗物」とか「唐塗」という。

弘前市とその周辺で塗られる漆器類には変塗技法による物が多く、それらの技法の中でも、特にこの唐模様をもつ漆器の生産が多いことから、唐塗漆器のことを「津軽塗」と呼ぶ人が多い。

2 呼称の歴史

唐塗という語は、津軽藩の御国日記、正徳五乙未年（1715年）正月十七甲寅日に「唐塗之御文箱一つ…」、正徳六丙申年（1716年）七月十一戊辰日に「唐塗文台…」「唐塗御鼻紙箱…」「唐塗御硯箱…」「唐塗御多ばこ盆…」と書かれ、翌十二己巳日には「利休唐塗四」「唐塗一」と書かれている¹⁾。

宝暦八戊寅年（1758年）の津軽見聞記には「から塗」と書かれ³⁾、天保四癸巳年（1833年）五月の塗物伝書と、弘化三丙午年（1846年）の塗物秘伝書には「唐塗仕様」と書かれている²⁾。

年代の記録が無く、何時頃書かれたものか確かでない漆合方並に塗物家伝全には「から塗の事」「から塗研キ出しには…」と書かれている¹⁾。明治、大正そして今日も唐塗と書き「からぬり」と読んでいる。

3 呼称発生の背景

前述のように、弘前市において、唐塗という語は、1715年頃から今日まで用いられてきた語である。

漆器に初めて唐塗という呼称が付けられた頃、塗師達は「優れた技法」とか「めずらしい模様」という意味でこの語を用い、また漆器の使用者達は「上等な漆器」「めずらしい漆器」という意味で用いていたものと察せられる。

その理由は、鎌倉時代に禅宗とともに新しく渡来した中国の造形品を唐物と呼び、禅院生活の必需品として用い、武家生活にもとり入れ、日本の絵画や工芸にも大きな影響を及ぼしており、漢画や中国風の器具の製作を促していたという時代背景があるからである⁴⁾。

また別の理由は、池田源太郎が1697年から1704年まで、江戸の青海方で修業中に、唐物と呼ばれていた漆器類を見る機会もあり、更に唐の転意として、「めずらしい」「上等」などという意味があることから考えると、当時の津軽藩で塗られていた黒塗や朱塗の漆器類と比較して、変塗技法による漆器はめずらしく、デザインも斬新で上等であり、彩漆の重ね塗が唐物と呼ばれる漆器と似ているように見え、唐物と呼ぶに相応しいことから、この呼称を生んだものと推察できる⁵⁾。

4 他の用語との関連

「靱殻や卵殻を用い、韓の国から伝来した技法であることから、靱塗とか韓塗とも書かれた」と言われているが、靱殻を用いた虫喰塗、卵殻を用いた卵殻塗は、唐塗と明確に区別できる技法であり、これらの字は、むしろ当て字によるものと解したい。

5 上塗の色彩と呼称

上塗の色彩によって、唐塗された漆器を「呂上げの唐塗」「あお上げの唐塗」「黒上げの唐塗」と呼んだりしている。

塗師達は単に「呂上げ」「あお上げ」「黒上げ」と呼ぶのが普通である。

このように、上塗の色彩によって呼ばれる唐塗漆器にどのような呼称が付けられているのか、最も簡単な分類をしてみると表1のようになる。

弘前市とその周辺で塗られる唐塗漆器は、表1にある呂上げ類が最も多く、彩漆類は少ない。

表1 上塗の色彩と唐塗呼称

No.	上塗の色彩	唐塗の呼称
1	透	呂上げ
2		梨地上げ
3	黒	黒上げ
4	紅柄	紅柄上げ
5	だいたい	髭肌上げ
6	朱	朱上げ
7	茶	栗皮上げ
8	くさ(みどり)	あお上げ
9	白	白上げ
10	色粉(朱)上げ	大和塗

史的变化についての考察

1 津軽藩における唐塗漆器誕生の背景

現在、弘前市とその周辺で塗られ「津軽塗」と呼ばれている漆器類の変塗技法は、塗師池田源兵衛の子源太郎に依って始められ、若狭塗、青海波塗、蒔絵法などの技法と関係が深い。

福井県に若狭塗と呼ばれる漆器類がある。これらの漆器の髹漆法は、慶長年間（1596～1615年）に、漆工松浦三十郎が菊麩塗と称し、西脇紋右門が磯辺塗と称した創作技法であり、この他にも万治年間（1658～1661年）に金銀箔や卵殻などを使用する技法を発明し、藩主が若狭塗と命名した技法である。

弘前市へ変塗技法が伝播してきた経緯は、寛文10年（1670年）、^{おぼま}小浜から弘前（津軽藩）へ来た池田源兵衛が、小浜において、これら若狭塗の漆器類を見、若狭塗の髹漆法を体得していたので、津軽藩の塗師として召抱えられるというかたちで移入された、と考えることができる。

この源兵衛が、1686年、江戸で病死した時、息子の源太郎は12才であり、この年令に達した当時の子どもが、親の仕事内容を全く知らないということは考えられず、また親として源兵衛が、自分の子どもを塗師にしたいと願っていたとすれば、塗技法に関しての教育もしていたものと察することができる。

若狭塗についてのある種の技法は、すでに源太郎へ伝授されていたのに加え、源太郎は江戸の青海方で、漆液の粘度を変えることによる青海波塗や蒔絵法を修得し、多くの変塗技法による漆器類を見学した後津軽藩へ帰り、創作活動を行なっているので、源太郎による変塗模様の漆器は偶然的発見による発明品とはいえない。

「定盤を研いでいる時に、定盤に現われた雲状色彩からヒントを得た」という話は、今日の唐塗模様の漆器と、そのような彩漆を付着させた定盤を見る限りにおいて説得力をもつものであるが、前述のような変塗技法の移入の経緯や親子間の塗技法伝授の形態を考慮した場合には疑問である。

また、漆液や用具類の管理の厳しさからは、彩漆が数mmも厚く、しかも堆朱のように彩漆の層が美的に見える定盤類は出来難いことや、塗師の習慣として、注文品の漆器は注文数より多く製作し、試作してあることから考えると、「定盤を研いで……ヒントを得た」という話は極めて不自然である。

寧ろ、不満に思えた作品には再度塗り重ね、製作依頼がなくても創作活動を行ない、このような作品の中から新しい模様の手がかりを得、研鑽努力した結果、優れた変塗漆器が作られ、それらの一つに唐塗技法があったと考えるべきであろう。

源太郎が唐塗を発表する以前、青海勘七（1688～1704年）が塗った千鳥蒔絵青海波塗硯箱（242×180×44mm・青森県立郷土館蔵）の内部に、へら目付け・研ぎ出し唐塗風の塗技法に依る模様を見ることができる。そしてこの模様と技法が後の唐塗の発明と関連深いことが、この硯箱についての藤田清正氏の技法の分析的観察記録によって明らかにできる。

藤田氏は次のように述べている。

- ① 黒漆を仕掛し、自由に移動させたへらで、へら目を付けて乾燥させる。
- ② 灰色彩漆で再度仕掛をする。乾燥させる。
- ③ 黄白色彩漆で細かい彩色をする。乾燥させる。
- ④ 暗い灰色彩漆を全面に塗り、研ぎ出し、呂色仕上げする。

このように唐塗技法と極めて似た師匠の技法を習得して津軽へ帰った源太郎が、1704年頃から創作活動を行ない、他地方に無い模様であることを確かめ、技法が安定した時点で「唐塗」と命名し、1715年頃に発表したとすれば、この技法の発明は1704～1714年と考えることができる。

2 唐塗技法の史的变化

(1) 唐模様の基本の作り方

創作された1714年頃から今日までの、唐塗技法の中の仕掛模様の作り方は、次のように2つに分けられる。

- ① 絞漆を器物全体に塗り、この塗膜が乾燥しないうちに凹凸をつける。

② 絞漆を器物に付ける。

先ず、①の技法が主体をしめており、次に①と②の技法が混在し、今日では②の技法が主体をしめている。

(2) 唐模様の基本を作る用具の種類

唐模様の基本を作る用具として、次のようなものをあげることができる。用具の大きさを問題にするとその数は更に多くなる。

- ①仕掛べら（多孔状のもの） ②漆べら ③漆べらの先端に凹凸を付けたもの ④紙をタンポ状に丸くしたもの ⑤紙を円筒状に巻いて、先端を細長に切り折り返えて小鳥の脚のような形にしたもの ⑥紙漉こより
⑦稲わら ⑧棒 ⑨糸瓜ひちま ⑩刷毛 ⑪筆 ⑫織り目の粗さの異なる布で作ったタンポ

(3) 用具の動かし方

唐模様を作るための用具の動かし方には次のような運動をあげることができる。運動範囲や強さも様々で、模様誕生の多様性もここに起因している。

- ①叩く ②直線運動をさせる ③回転運動をさせる ④円運動をさせる ⑤自由に動かす ⑥先ず用具を密着させ、それを上に引き上げる

以上のように、絞漆をいつ付着させるか、どのような用具を使用し、どのようにそれらを動かして付着させるのかという唐模様を作る要素から

- ① 唐模様を付ける
② 絞立てする
③ マキ（渦巻¹⁾）
④ ひねり模様
⑤ ねじり模様

などの用語が生じ、唐模様を作る基本的な要素だけみたとしても、多彩な技法が駆使されていたことを窺うことができる。

これらの要素へ、^{おげ}上塗の彩漆の要素が加わり、唐塗はその数を更に増し、このことが、唐塗の多様性となり、個人の好みや、その時代の社会的要求に対応できる漆器となり、長い歴史を歩む要因となった。

(4) 仕掛べらについて

唐模様を作る用具は様々あり、それらがどのような歴史変化をしたか明らかにできるのは仕掛べらの形である。

漆べらや波形をつくる（櫛目模様も含める）へら類が発展して、写真2のようにへらの先端に大き目の凹凸が付けられ、これが昭和初年頃まで使用された。

へらや薄い小板に焼火箸で多くの孔をあけ、写真1のようなへらを作り、仕掛べらと称した。模様のからくりという意味で名付けた呼称と思われる。大正9年に「仕掛⁶⁾」と記されている。

不定形の仕掛べらも昭和35年頃から、左右対称の形が多くなり今日に至っている。

(5) 唐塗模様の作り方

天保四癸巳年（1833年）の塗物伝書には「漆通たる紙之古キヲ丸ク致 模様²⁾に付也」と書かれ、弘化三丙午年（1846年）の塗物秘伝書には「漆を通すたる 紙の古を 丸く致 唐模様を付るなり」と書かれている。

大正9年（1920年）には「仕掛塗⁶⁾り…略…大同小異の斑点様のもの へらにて付ける あられ形の鉄瓶の如く高く付けるものなり」と書かれている。

以上の資料から、漉紙からへらに変化したというよりも寧ろ、様々な用具が集約化され、仕掛べらに固定化されたと考えることが妥当であろう。

弘化三年の唐模様は、唐草模様のように動きのある絞漆の付け方をしたであろうことが、古作漆器類から窺うことができる。

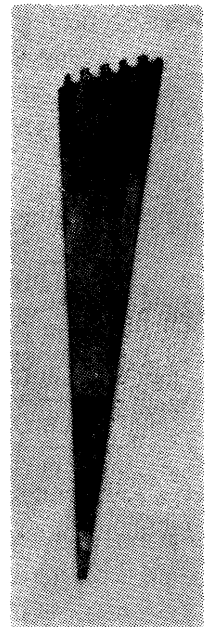


写真2 昭和初期頃までの仕掛べら
長さ27.5cm

現在の唐模様は写真3・A, 3・Bのようであり, これは産業形態の変化, 工程の規格化などの諸要求によることが主原因となって固定化したものである。



写真3.A 仕掛けべらによる唐模様・部分拡大

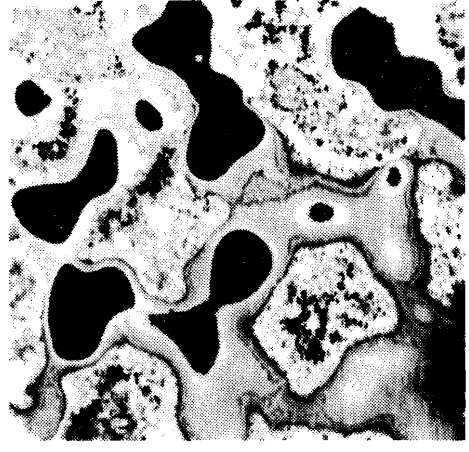


写真3.B 唐塗・部分拡大

3 唐塗技法

(1) 弘化三年(1846年)の唐塗技法

「生漆目形拾文目 水にて合せ 十五日程からし 其上右の漆を 黒メるなり 右の漆 随分堅く致し 夫にても かたく無之候ハ、少し加減を見て 唐土を加へ 思ふ道具に塗 其上漆を通したる 紙の古を 丸く致 唐模様を付るなり 其上 一夜からし 摺り漆を致し 青漆黄成とも塗り 一夜かわかし ほん²⁾の木炭にて研キ 三日程かわかし 鹿ク石香にて 指の腹へ付程 磨也 尤 油も付 磨く」

生漆へ水を加えたり, 唐土(塩基性炭酸鉛)を混入することによって絞漆の粘土調整をしている。水分を加える意義は, 生漆の粘度測定値からも知ることができる。

岩手県二戸郡浄法寺町小又米蔵氏の採取した生漆の粘度値を表2とした。

表2 生漆の粘度

生漆の呼び名と粘度		備考 ⁸⁾	
呼び名	粘度(×10 ² cP)	加熱減量(%)	採取時期
初辺(一号)	17.53	22.79	6月中旬～7月中旬
盛物(二号)	5.12	12.41	7月中旬～8月下旬
盛物(三号)	6.20		
末辺(四号)	13.18	14.51	8月下旬～9月下旬

表2から, 含有水分が多いとされている初辺, 末辺と, 含有水分が少ないとされている盛物の漆液の粘度を比較してみると, 水分が多いと粘度も大きくなり, 粘度の大きい絞漆をつくるために, 生漆へ水を混合していた当時の粘度調整法を窺い知ることができた。

粘度調整を終えた漆を器物に塗り, この塗膜面に, 紙をタンポ状に丸くした用具で凹凸を生じさせている。これが現在の仕掛に相当し, 当時はこの凹凸を唐模様と呼んでいた。

漆で固め, 彩漆を塗り, 研磨の工程を経て作業が完了している。

この塗技法が行なわれていた頃から100年以上経た今日、この唐塗技法がどのように変化したのか、また変化せずに残った工程はどれかを確認するために、唐塗技法の一つである大和塗工程について調べてみた。

(2) 大和塗の工程

唐塗技法で塗られる漆器の大部分は上塗の色彩で呼ばれる。しかし、上塗の色彩に関連をもたない呼称の大和塗が、大正元年(1912年)から昭和20年(1945年)頃まで久保登氏などに依って塗られていた。

唐塗技法の中で色粉を蒔くこの技法は、ななこ塗の中で色粉を蒔く錦塗と同じような位置関係にあるといえる。

朱塗されたこの漆器は個性的で、大正時代を忍ぶことができると同時に、不景気な時代を背景として、販路拡大の試みとして塗られたとも考えられる。次に久保博氏の大和塗工程を書く。

素材調整(木材、木質材料)、布着せ、下地、下塗、中塗された後、次のような工程によって塗られる。

① 仕掛…他の唐塗に用いられる仕掛べらより、少し大き目の孔をあけた仕掛べらを使用し、絞漆に依って厚目の模様を付ける。

絞漆の厚さは0.07~0.20mmあり、平均値が0.15mmである。

絞漆は、素黒目漆1kgと油煙0.32kgを混ぜ、これに型置漆(商品名)1kgを混ぜ、更に卵白を0.37kg混ぜる。

② 乾燥…温度18°C~20°C、湿度80%の漆風呂へ4日間入れ、乾燥させる。

③ 石黄塗掛…次のような割合で混合された彩漆を、漆刷毛で薄く全面に塗る。

素黒目漆1kgと石黄1.3kgを混ぜる。

④ 乾燥…漆風呂へ1日入れる。

⑤ 朱塗掛塗…次のような割合で混合された朱漆を漆刷毛で全面に塗る。

素黒目漆1kg、カドミウム朱(310#)0.53kg、本朱0.27kg。この朱漆の粘度は $36.60 \times 10^2 \text{cP}$ である。

⑥ 乾燥…漆風呂へ1日入れる。

⑦ 呂塗…素黒目漆を漆刷毛で全面に、厚目に塗る。

⑧ 三葉描き…青漆(みどり色の彩漆)を、穂が硬い刷毛に付け、刷毛を直立させ、一端を支点として回転運動させ、刷毛目模様のある円形を描く。このような円形を三個接近させ、三葉のような感じの模様にする。

青漆をつくるには、素黒目漆1kgに対して、金こんじょう0.05kg、石黄0.1kgを一応の基準混合量として、好みの色になるように混ぜる。

粘度を $75.5 \times 10^2 \text{cP}$ くらいにしておく。

⑨ 乾燥…漆風呂へ二日間入れる。

⑩ 粉蒔…工程⑤で用いた朱漆を漆刷毛で、全面に、普通の厚さに塗り、直ちにこの上に錫粉10:朱0.5に混ぜた粉を蒔く。

⑪ 乾燥…漆風呂へ1~2日入れる。

⑫ 留塗…工程⑤で用いた朱漆を溶剤で希釈し、漆刷毛で出来るだけ薄く、色むらが生じないように注意しながら塗り込む。

⑬ 乾燥…漆風呂へ1日入れる。

⑭ 荒研ぎ…大清水砥で水研ぎするが、耐水研磨紙240#で水研ぎする場合もある。

⑮ 乾燥…漆風呂へ1日入れる。

⑯ 押し研ぎ…荒研ぎに使用した大清水砥より、粒度の小さい大清水砥で水研ぎするが、耐水研磨紙320#で水研ぎする場合もある。

⑰ こぎ塗…工程⑤で用いた朱漆を、へらで扱き塗りする。

⑱ 乾燥…漆風呂へ1日入れる。

⑲ 仕上げ研ぎ…押し研ぎに使用した大清水砥より、更に粒度の小さい大清水砥で水研ぎする。耐水研磨紙400#で水研ぎする場合もある。ここで一応研ぎが完了する。

以上で大和塗特有の色彩と模様が現われる。次からの工程は、鏡面仕上げの津軽塗に共通した、呂色仕上

げと呼ばれている艶付け工程が行なわれて完成する。

秘伝書に書かれている唐塗、唐塗技法の一種である大和塗、市販されている唐塗漆器などを比較してみると、次の諸点で共通している。

- ① 塗膜面に絞漆凸面がつくられる。
 - ② この凸面が、動物、植物、自然の風景や心霊的なものの描写という具象的な模様でない。
 - ③ 彩漆が塗られたり、塗り重ねられたりする場合、彩漆を斑点状に点在させる。
- その他の変塗工程や変塗技法などは、唐塗に限らず、髹漆法として共通しているものである。

結 言

唐塗は、弘前市とその周辺で塗られる漆器類の中で、最も生産数の多い漆器である。

そのため、弘前市とその周辺で塗られる漆器を総称して「津軽塗」と呼んでいるにもかかわらず、唐塗を津軽塗と呼ぶ人が多い。

唐塗という語は、1715年頃から古文書に書かれ、今日までその呼称が続いている。

唐塗技法は池田源太郎に依って、1704～1714年頃に創案され、1715年頃から安定した技法となった。

唐塗の基本となる仕掛模様は、絞漆を様々な用具で、いろいろな動きによってつくるので、そのパターンの数は極めて多く、これに塗られる彩漆の種類も多いので、唐塗と呼ばれる模様の漆器は、個人の好みや社会の要求に対応できる技術内容をもつことになり、このことによって260年の歴史を歩むことができたと言える。

創作当時の唐塗は、現在と同様に、様々ある変塗技法の中の一つの技法でしかなかった。

当時、黒塗や朱塗の漆器が多かった南部藩や津軽藩内、また変塗漆器が塗られていた他地方にも見られない「めずらしい」「上等」な漆器であったことから、「唐塗」と呼ばれるようになった。

唐塗技法の誕生に、若狭塗の技法、青海波塗、蒔絵法が深く関係していることは、源太郎の父が若狭の塗師であったこと、青海勘七が塗った千鳥蒔絵青海波硯箱の内部の塗技法、青海源兵衛が塗った漆器類などから窺うことができる。

唐塗は、絞漆で凸面が自由に構成され、彩漆が斑点状に点在させられた模様の漆器で、人の好み、社会の変化に対応できる要素を内在している。

このことは、写真4から窺うことができる。動きのある絞漆の模様、彩漆の点在など今日の唐塗と比較して、自由さと偶然的楽しさを見出すことができる。

最近、仕掛べらの形やその使用法・工程、色彩などの固定化・画一化がすすめられ、地方色が濃くなる反面、唐塗の歴史を支えてきた自由さと、これを因にしていた対応性と発展性が失なわれようとしている点に、問題があることを指摘したい。

本研究にあたり、久保博氏から懇切な御指導や御援助をいただいた。ここで深く感謝の意を表します。

著者に髹漆法を御指導下さり、資料を提供して下さいました県工業試験場主任研究員藤田清正氏、櫛引元三氏や協力して下さいました本学文部技官中畑武夫氏、齋藤彰、橋本芳弘、相馬恵美子の各氏に、ここで御礼申し上げます。

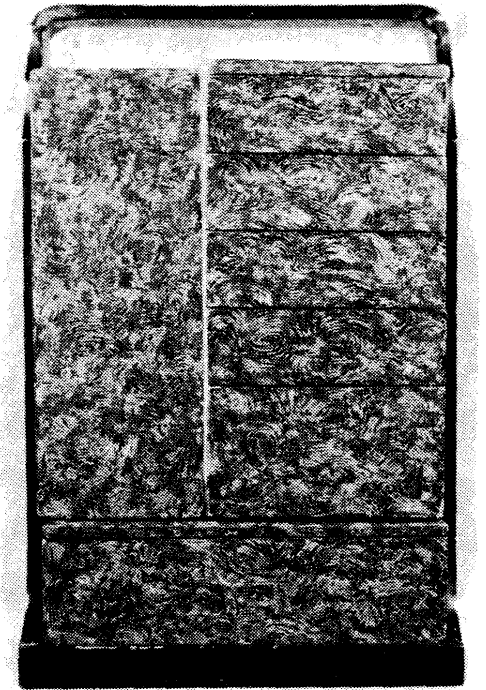


写真4 唐塗重箱、櫛引元三氏所蔵

参 考 文 献

- 1) 青森県教育委員会, 青森県無形文化財調査報告書津軽塗, 青森県教育委員会, 昭和51年1月14日
- 2) 佐藤武司他, 津軽塗秘伝書, 弘前大学教育学部技術科教室, 昭和50年8月8日
- 3) 弘前市経済部商工課, 津軽塗産地診断報告書, 弘前市, 昭和46年1月
- 4) 水尾比呂志, 日本美術史, 筑摩書房, 昭和49年8月15日
- 5) 渡辺ひろし, グランド現代百科事典5, 学習研究社, 昭和50年7月1日
- 6) 弘前図書館, 津軽覚え書, 弘前図書館後援会, 昭和49年2月5日
- 7) 沢口悟一, 日本漆工の研究, 美術出版社, 昭和41年7月10日
- 8) 中小企業庁, 漆液の耐候性に関する研究, 中小企業庁, 昭和42年10月

(昭和51年12月15日受理)